

□9月8日説教(短縮版)隅野徹牧師
「主の足跡に続く」(I ペトロ2:11~25)

24・25節では「復活し、天に昇られ、もう肉眼ではみることのできないイエス・キリスト」を、筆者であるペトロは「まさに心の中の霊の眼でキリストを見ている」と私は感じます。「一生お従いするところだったのに裏切ってしまう、主を十字架につける大きな罪を犯してしまった私。しかし主は、苦しみに耐えつつ、わたしだけでなく、十字架にかける罪をおかした全ての者を愛し、ゆるされたのだ。まさにご自分の身に負われたその傷によって、わたしは、いやされたのである。羊のようにさまよっていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ることができたのだ…」そのことを霊の眼で、何度も見て思い出しているペトロ。キリストの十字架の贖いのゆえに、すべての人間が「羊のようにさまよっていた状態から神のもとに帰ることができる」恵みを実感しているのであります。

そのペトロ自身も何度ももう獄されるなど「厳しい迫害」に遭いました。しかし、実際に「見た」キリストの姿をたどる歩みをしました。その自分を見た人が、同じような足跡をたどることを心から願っているのです。キリスト者達が苦しむことによって、それをよく見ているキリストを知らない人々は羊のようにさまよっていた状態から、罪を離れることができ、全人類の監督者である神のところに帰ることができるのだ、というペトロの渾身の教え。対立と分断が続くこの世にあって、私たちは大切な教えとして心に刻んでまいりたいと願います。

まずキリストが模範となって苦難の道をすすみ行かれた。その姿を見たペトロ達使徒が羊のようにさまよっていた状態から救われた。その後、大変な迫害にあっていった初期のキリスト者たちが「迫害のなかでも敵を愛し、キリストを証した。ペトロやパウロなど「使徒たちの姿をよく見て救われ」、福音がひろまっていった。私たちが住むこの日本においても、おおくのキリスト者たちが迫害されましたが、その姿を通して、多くの人が「そこに真実を見出し」キリストを信じた…この連鎖が今日までずっと続いているのだと思います。イエスの足跡に従って進むことは大変苦しみを伴うことですが、どんなに自分では不恰好に見えようと、神はそのみなさんのその姿を通して栄光を表されます。そのことを忘れずにこれからの長い道のりを進んでいきましょう。
(終)